

浜松市立東部中学校 R5 学校評価まとめ

評価内容		R 3	R 4	R 5		自己評価	学校関係者評価	
生 豊 み か な つ 生 徒 が 指 導 を	①教職員は、子ども一人一人を理解し、大切にしている	生徒	3.30	3.39	3.51	A	<p>①・②・③のすべてにおいて、生徒・保護者からの本校に対する評価が高いことは喜ばしい。これらは、どれだけ社会が変化しようとも、中学校教育において変わらず大切にすべきものとして、生徒との関わりの中で重きを置いていきたい。また、「命を大切にし、生き方を探究する生徒」「考える力を働かせる生徒」「挑戦する心、学ぶ心、感謝する心を持ち続ける生徒」という、本校が考える育成すべき生徒像を全教職員で確実に共有し、更なる充実を図っていきたい。</p>	<p>今後もこのような高い評価を維持できるように学校経営を進めてもらいたい。 自転車通学者のマナーの悪さについては、「被害者になりうる意識」と「加害者になりうる意識」ともに希薄だからではないか。生徒に「命を大切にしよう」という意識づけをしてほしい。あわせて、地域の協力をどのようにして得ていくかを検討してほしい。</p>
		保護者	2.67	2.67	2.81			
	②教職員は、生命を大切に心や社会のルールを守る態度を、子どもに身に付けさせている	生徒	3.39	3.39	3.52	A		
		保護者	3.15	3.18	3.15			
	③教職員は、子どもの間違っただけの行動に対して適切に指導している	生徒	3.61	3.60	3.65	A		
		保護者	3.05	3.07	3.08			
す べ て の 支 え る 子 ど も の 学 び の 指 導	④学校は、基礎的な学力が身につくようにわかりやすい授業をしている	生徒	3.43	3.49	3.51	A	<p>④・⑤・⑥については、生徒からの評価に対して、保護者からの評価は総じて低く、両者の評価には大きな隔りがある。毎時間の授業は充実しており、その場で生徒は「分かった」と実感するものの、定着度調査や実力テストにおける点数に反映されず、保護者は物足りなさを感じる、というのが隔りの原因ではないだろうか。目標・指導・評価を一体化させた授業や、ICTを活用した授業、協同的な学習活動などが生徒にとって学習内容の定着に向けた意義のあるものになっているのか、その方法について検討する必要がある。</p> <p>⑦については、生徒の自主的な学習習慣の確立に向けて、課題や単元テストの内容や形態が適切か否かを各教科で検証するとともに、量やタイミングについて教科部ごとに検討し、教科間で調整する必要がある。</p>	<p>「なぜ勉強するのか」を生徒に的確に伝えないと、ICTなどのツールを充実させても効果は期待できないのではないかと思う。</p>
		保護者	2.93	2.97	2.97			
	⑤教職員は、子どもの興味や意欲を高める授業を工夫している	生徒	3.25	3.35	3.42	B		
		保護者	2.87	2.92	2.94			
	⑥学校は、子ども個々に応じた学習の手助けを行っている	生徒	3.49	3.53	3.55	B		
		保護者	2.67	2.61	2.81			
	⑦家庭では、自主的、計画的に学習に取り組んでいる (保護者) 家庭では、お子さんによりよい学習習慣が身につくように意識している	生徒	2.47	2.57	2.99	C		
		保護者	2.90	2.95	2.89			
安 心 し て 学 ぶ 学 校 環 境	⑧教職員は、安全で、安心できる学校、学級づくりに取り組んでいる	生徒	3.39	3.39	3.52	A	<p>⑧、⑨について、多くの生徒にとって、学校は安心・安全な場になっていると言える。今後も「いじめはどの子供にも、どこでも起こりうる(浜松市いじめの防止等のための基本的な方針より)」という意識を持ち、生徒が放つ些細なサインを見逃すことがないよう、生徒の言動に注視していく。なお、評価が4.00に満たないのは、表面化しない隠れた部分で不適応が起こっている可能性があるからだと考えられる。生徒が気軽に相談できる雰囲気をつくることが不可欠である。</p>	<p>生徒・保護者からの高い評価は、学年担任制の利点が生かされているからではないかと思う。 SNSやネット上の書き込みなどのトラブル、いじめ等をいち早く把握するためにも、こうした取組を続けていくべきだ。</p>
		保護者	3.15	3.18	3.15			
	⑨教職員は、「いじめ防止基本法」に基づいて、いじめ行為の未然防止、いじめ対応、いじめ行為の再発防止に適切に対応している	生徒			3.48	B		
		保護者			3.08			
と も に 育 つ 地 域 ・ 校 種 間 連 携	⑩地域行事やボランティア活動に積極的に参加している (保護者) 家庭では、おさんが地域行事やボランティア活動に参加するよううながしている (教職員) ボランティア指導は適切であった	生徒	3.26	3.35	2.39	C	<p>⑩の対人支援のボランティア活動には感染リスクが伴うため、コロナ禍では敬遠されてきた。その影響がアフターコロナへと転換された現在にも見られる。社会貢献活動に参加することは、視野を広げたり、自主性を身につけたりすることにつながるため、週末や長期休業などを利用した参加を促していく必要がある。 ⑪・⑫については、学校運営協議会や同窓会の協力を得て、多くの地域人材を既存の教育活動に活用してきたプラスの面と、教育活動に様々な人が関わることによる運営の難しさを感じているマイナスの面が相まった評価となったようである。地域との連絡・調整が円滑に進む方法を探る必要がある。</p>	<p>地域人材を上手に活用できていると思うので、今後も積極的に協力していきたい。</p>
		保護者	2.71	2.70	2.65			
		教職員	2.85	3.01	3.15			
	⑪地域人材の活用は適切であった	教職員	3.18	3.02	3.03	B		
⑫コミュニティ・スクールの運営は適切であった	教職員	3.38	3.23	3.06	B			

評価内容			R 3	R 4	R 5		自己評価	学校関係者評価
双方向のかかわり のかかわり 家庭	⑬学校は、三者相談や教育相談が充実しており、相談しやすい	保護者	2.92	2.96	2.93	C	⑬については、年間2～3回の面談が有意義なものとなるように、生徒・保護者が面談に何を求めているかを把握する必要がある。生徒・保護者を取り巻く状況が多様化、深刻化する傾向も見られるため、日常的に相談しやすい雰囲気をつくる必要がある。 ⑮については、メール連絡アプリの利用により、タイムリーな情報提供が可能となった。保護者にとって情報過多になることがないように、適切な量とタイミングを考慮して情報提供を心掛けていく。	タブレット導入でアンケート集計が容易になった。アンケートを頻繁に行うことができるので、改善に向けて積極的に活用してほしい。
	⑭学校は、家庭・地域と積極的に連携・協力している	保護者	2.96	2.92	2.98	C		
	⑮学校は、たよりやホームページなどで情報をよく発信している	保護者	3.11	3.03	3.17	B		
	⑯授業参観会、教育相談、三者面談の運営は適切であった	教職員	3.45	3.50	3.30	B		
前向きで活動的な 学校文化	⑰学校生活は楽しい (保護者) お子さんは、学校生活を楽しいと感じているようである	生徒	3.59	3.57	3.62	A	⑰、⑱、⑲のすべてにおいて、生徒・保護者の評価は高い数値で安定しており、学校生活への満足度は高いと言える。その一方で、教職員の評価は高いとは言えない。コロナ禍を経て校内行事の在り方は変わり、地域移行を見据えた部活動は過渡期にある。これまでの指導スタイルや理想としてきた教師像の変換を余儀なくされている昨今の状況に、教職員が苦慮している表れてはいるか。学校を取り巻く環境が大きく変わる中で、新しい学校づくりに携わることができる喜びと責任を感じつつ、よい方向に転換する柔軟な発想を持って、教職員としての責務を果たしていく。	スマホの普及やコロナなどのさまざまな要因で生徒のコミュニケーション能力が落ちている。授業以外の活動も含めて、コミュニケーション能力を養ってもらいたい。
		保護者	3.15	3.22	3.32			
	⑱学校行事は楽しく、充実している (保護者) お子さんは、学校行事を楽しみにしている (教職員) 文化活動発表会、体育大会の運営は適切であった	生徒	3.57	3.53	3.69	A		
		保護者	3.23	3.32	3.46			
		教職員	3.20	3.02	2.44			
	⑲部活動は楽しく、充実している (保護者) お子さんにとって部活動は、充実した活動になっている (教職員) 部活動指導は適切であった	生徒	3.32	3.15	3.62	A		
		保護者	3.25	3.28	3.38			
		教職員	3.14	3.11	2.79			
戦略的で柔軟な 学校運営	⑳将来の進路や職業について学んだり、考えたりしている (保護者) お子さんは、学校で将来の進路や職業について学び、考えている (教職員) 総合的な学習における3年間を見通した指導は適切であった	生徒	2.96	3.01	3.04	B	㉑における生徒・保護者の評価、㉒における教職員の評価は右肩上がりに良くなっているが、十分だとは言えない。地域探究プログラムを中心に据えた総合的な学習の時間の活動や、職場体験活動・キャリア講座などのワンショット活動は軌道に乗りつつあるので、今後は活動の目的を生徒に確実に伝え、事後学習を丁寧に行っていく、どのような力が身についているのかを、生徒自身に実感させる必要がある。	学年担任制は導入初年度ということもあり、是非の判断がつかない部分もある。来年度以降もアンケートを行い、改善点を見つけて、対応していくべきである。 例えば、生徒に関わる教師が増えることで、「先生によって言っていること(指導内容)が違う」という問題が出てくるのではと思うが、そのような疑問点を明らかにしていく必要があるだろう。また、小学生とその保護者にも子の取組を紹介することで、中学校生活に滝旺しやすくなるのではないかとと思われる。
		保護者	2.78	2.72	2.78			
		教職員	3.10	2.95	2.41			
	㉒キャリア教育は適切であった	教職員	3.08	3.10	3.18	B		
	㉓学年担任制により複数の教員が様々な視点で生徒を見ることで、生徒のよさを共有したり、小さなサインや変化を生徒の成長につなげられている。	教職員			2.80	C		
	㉔学年担任制において「働きがい」を見つけることができている	教職員			2.20	C		
㉕水曜日の放課後の活動(東中塾、学級運営委員会など)はうまくいっている	教職員			2.70	C			
気持ちのそろう 教職員集団	㉖学校教育目標「自らの可能性に挑戦し続ける生徒の育成」、スローガン「THINK & CHALLENGE」を意識しながら教育活動に携わることができた *R4スローガンは「CHALLENGE」、R3は「一歩前進」	教職員	3.10	3.20	3.18	B	㉕の東中塾については、自主室としての機能が定着しつつある点は評価できる。その一方で、教職員が「東中塾に足を運んでほしい」と考える生徒の参加率が高くなかった点が課題である。東中塾ではどのような学習ができるのかを生徒に分かりやすく提示するとともに、学級担任や教科担任による生徒への個別のガイダンス指導を充実させる必要がある。	
	㉗組織で指導・支援にあたることで、各々がもつ知識や技術を学ぶ機会を得ることにつながっている	教職員			3.07	B		

\*R3・R4・R5にある数値は、アンケートにおける回答を点数化した数値(そう思う:4点、だいたいそう思う:3点、あまりそう思わない:2点、そう思わない:1点)の平均値であり、A・B・Cの3段階で評価している。

\*評価内容にある8つのカテゴリは、「スクールパス・モデル ーカのある学校の8つの要素ー」からの引用である。(参考文献:志水宏吉「公立学校の底力」ちくま新書)